

震災後の子どもたち (21)

おとなと子ども

森末 哲朗

最近、尼崎に住む古くからの友人に会った。

彼女は障害者のセンターで働いていて、仕事柄ボ

ランティアの若い学生たちとの接触も多いようだ。

その学生たちの中に、ひとつ気になる傾向がある

と彼女は言う。

「どんなことなん？」

「……ひとこと言ったら、あんまり、おとなと出

会ってへん、いうことかな」

「もまれてない、いう意味やろか？」

「まあ、そんな感じかな」

そういえば、近頃の子どもたちにとって、おとな

といえは親と教師しか知らないという指摘を、何か

の本で読んだことがある。

そのことがどんな意味を持つのか、あまり深くは

考えずにきたのだが、彼女が指摘したことと重なる話を聞いたことを想い出した。

阪急六甲の南側に、開店して三十年あまりになる喫茶店がある。そのママさんが、こんなことをため息まじりに語っていたことがある。

「少し前のことですけどね、K大学の学生さんが来てたんですよ。『おばさん、おばさん、水がこぼれたよ』と言うんです。テーブルのところに行ったら、グラスが床に落ちてるんですよ。『これ、あなたがこぼしたんとちがうの?』と訊いたら、『はい』と涼しい顔なんですよ。自分でこぼしといて、その言い方はないでしょう。つい、説教してしまいました」。

こんな内容の話だった。その学生にとって、全くの他人であるママさんと、自分の家にいる母親との区別がよくついてないのではなからうか、そう思えた。それにしても、たとえ自分の家でグラスを落としたとしても、「お母さん、水がこぼれたよ」みた

いな言い方はないだろう。

ママさんとそんな話をしていたら、

「私もながいあいだ、K大学の学生さんを見てきましたけど、変わりましたね」と言う。

客としてやってくる学生たちを見つめ続けてきた眼には、その変化がよく分かるのだろう。ひと言で言えば「世間知らず」が多くなったということだろうか。

K大学といえば、このあたりでは名の通った国立大学である。そこに合格するまでの十八年間、いや、浪人生活もあるとして二十年ほどの時間を、「おばさん、水がこぼれた」と呼んだ学生は、どんな風に過ごしてきたのだろうか。親と教師以外のお



となと、すっかり出会ったことがあるのだろうか。家と学校と塾とコンビニくらいが彼の世界のほとんどだったのだろうか。もしそうだとしたら、他者として「世間」を覚えてくれるおとなと出会う可能性はとても低いものだろう。

こんなことを思っているほくも、いざ二十歳の頃を振り返ってみると、穴があつたら入りたいたいような恥ずかしい経験をいくつもいくつも重ねていた世間知らずだったから、あまり大きなことは言えない。そして現在もまだ「それで、五十歳？」と言われても何の不思議もない、頼りない中年ではある。しかし、そんなほくでも、やはりこれは気になるという体験を、この夏淡路島でしてしまつたのである。

ボンボンベッド

夏休みも終わりに近づいた土曜日、淡路島へ泊まりがけで魚釣りに出かけることになった。参加者は

どんぐりクラブの保護者数人と子ども十人ほどだった。

その中に、一郎（仮名）がいた。彼は四年生。神戸市北区に住んでいて、灘区にあるどんぐりクラブには普段の放課後は通えないのだが、夏休みの間だけ母親が車で送り迎えをすることで、毎日通っている子だった。

明石大橋を車で渡り、淡路島で農業をしているさとし（六年生）のおじいちゃんの家全員が泊めてもらうことになった。実直で勤勉なおじいちゃん、皆んなを快く迎えてくれた。

土曜日は思いきり早寝をして、翌日曜日の朝は四時に起きて、暗いうちに磯に向かった。

久しぶりの潮の香は気持ち良かった。釣果はあまりはかばかしくはなかったが、海と太陽にはさまれて、ビールを飲みながら竿を垂れる時間は格別のものがあつた。

昼をまわって、少し疲れて、さとしのおじいちゃん

んの家へ引き揚げた。庭には縁台と、折りたたみ式のボンボンベッドがあった。

減多にすることのない早起きのため、身体を伸ばしたくなったのは、そのベッドで大の字になっていた。

そこへやってきたのが一郎だった。

「おっちゃん、そこ、のいて。ほくが、すわる」。

いきなりこう切りだされて、ほくはむっとなってしまった。一つしかないものをほくが独り占めしているのだから、こっちもほめられたものではないのだが、「のけろ」はないだろうと思えた。まして、一郎のものでもないのに。

「そんな言い方で、のける思とんのか！」

咄嗟にこんな言葉が口をついてでてしまった。一郎はとみれば、ポカンとした顔でこっちを見ていた。あーあ、柄の悪さがでてしまった、と吐いた言葉への後悔はしたもの、このベッドは断じて譲らんとぞと決意に近い感情に支配されている。改めて一郎

の顔を見ると、「このおっちゃん、なんでこんなに怒ってるんやろ」と、不思議そうな表情をしている。そうか、さっきの一郎の言いまわしの「おっちゃん」のところを「お母さん」に言いかえれば、容易に理解ができる。

「お母さん、そののいて。ほくが、すわる」。

一郎が母親をつかまえて、こんな物言いをしている場面には、何度かでくわしたことがある。しかし俺はお母さんではないぞ。お父さんでもないぞ。西区にいる一郎のおじいちゃんでもないぞ。三つや四つの子が言うようなことを、十歳にもなって言っていることを黙って認めるわけにはいかない。

一郎はすぐごとその場を去った。

ほくには、「おばさん、水がこぼれたよ」の学生と一郎とが重なって見える。一郎は十歳。学生は二十歳。あと十年のうちに、一郎が多くのおとなと出会い、少しは「世間」を知り、二十歳になった頃にはこの日のことは「ガキの頃の想い出」で済むのか

もしれない。でも、そうなる確証があるわけでもない。

地震とチャパツの少年

十歳から二十歳と書いたが、この年頃というのは、少年期から青春期を駆け抜ける時期でもある。多くのおとなの人生に触れたり、いい出会いを持ったりすると、それが一生のものにさえなったりする時期でもある。

ところが、当の少年たちにとっては、自分もそうだったが、あまりおとなのそばには寄って行きたくないという感情を持つ時期でもある。おおかたのおとなは「歳いくつ?」「何年生?」「ああそう、じゃあ受験やね」「どこ受けるの?」、ステレオタイプの質問に会い、いちいち応えるのがうっとおしい。久しぶりに顔見知りのおとなに出会ったら「大きくなったね」とくる。当り前だろうと言いつつとカドがたつから、あいまいに笑ってその場をやり過ごす

他はない。

チャパツにでもしていると、こんどは寄ってくるおとながまずいない。たまに寄ってきた時にはロクなことがない。自分はあずかり知らぬことを、「お前がやったんやろ」と責めたてたりする。

そんなわけで、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なその時期に、少年はそのことを避けたいと思ひ、おとなは、かする程度の出会いしか持てないでいることがままあるようなのだ。

「近頃の若いもんは」とおとなはほやき、少年たちは「けっ!」と舌を出す。

ところが、あの大地震の混乱の中で、おとなと少年たちとのこうした膠着状態が一挙に突破されたという稀有な体験を、多くの神戸市民は持っている。

日常の中ではかけらほどの接点さえもてないでいる少年（または青年）と老人。それが救援活動の中で出会い、あるチャパツの少年は自分の手を握りしめて「ありがとう、ありがとう」と頭を下げる老人

を見て「オレ、あんな風に言われたん、生まれて初めてや」と思う。老人にしても、普段は「ややこしそうな子」と、チャパツの少年たちを眺めていたかもしれない。だがいざとなったら、頭が赤いか黄色いか、そんなことはどうでもいいことだ。そのことに気がつく。

日常を細かく区分けしている垣根が取り払われて、人間と人間との裸の対峙が生まれる。

おとなと出会うとは、そういうことだろうと思う。地震に見舞われて良かったことなど何一つないのだが、敢えて「良かったこと」を挙げれば、普段は見向きもされないチャパツの少年たちが、テント村のおっちゃんやおばちゃん、仮設（住宅）のおじいちゃんやおばあちゃんたちから大いに見直されたことだろう。そのことは少年たちにとっても、自分の生き方を考え直す契機にさえなったわけで、もしあの大地震がなかったらこういう出会いは生まれなかったかもしれない。



話を一郎に戻そう。五〇〇年に一度と言われる程の大地震が、そんなにしょっちゅうやってくる筈もないわけで、そんなものに妙な「期待」をかけるのはほとんど意味がない。

もっと日常の中でこれからの十年を考えていくべきだろう。ではどうすればよいのか？

仕事柄なのか、元々のクセなのか、高みに立って「考察」するだけでは気が済まない。かといって、良い知恵も浮かばない。

ただ、もしかするとそのヒントにはなるかなと思えることが、意外にとっても身近な自分の足元にあったのだ。

キャンプでいちばんおもしろいこと

この夏、兵庫県養父郡大屋町にある「おおよすキー場」へキャンプに出かけた。今年で十一回目。

毎年、七泊八日の日程で行っているが、衣・食・住の基本的な部分は子どもたち自身が担うことになっている。お釜で三度の飯を炊き、洗濯機で服を洗い、干したりたたんだり、部屋の掃除をしたりと、子どもたちはそれなりに忙しい。

仕事はおとな、子どもは遊び、という親子キャンプなどにはありがちなやり方をやめて、「子どもも生活者のひとり」という考え方でいわば「合宿生活」を行うのだ。

小学一年生から六年生までのタテ長の集団だから、仕事についてはかなりの能力差があるのだが、そこはあっさりとして認めて、やれる者がやれることをするという動き方をしている。

難しいのは、子どもは子どもなりに人間関係を

持っていて、そこがうまくいっている年とそうでない年とでは、同じキャンプでも随分と味わいが違ってくる。いさかいが絶えない年もあれば、比較的穏やかな年もある。

しかし、いずれにせよ、子どもは大いに自己主張をし、いさかいを起こし、自分とは異なった「他者」を発見して成長して欲しいことには変わりがない。

そのためには、子どもたちが自分を磨くための「群れ」の存在がとても大きな意味をもっている。どنگりには、二十四人の群れがあるのだ。

神戸市長田区で、震災以降の街づくりを通じた人間模様を、いまもなお撮り続けている映画監督がいる。青池憲司さんだ。彼とおつき合いをさせてもらうようになって、かれこれ十年近くになる。その彼を中心とした「青池組」の撮影隊が、「群れの中で子どもは育つ」ということをテーマに、このキャンプに同行していた。NHK教育テレビで、どنگりの日常や畑の活動やこのキャンプでの様子が九月十

九日にオン・エアされた。

キャンプ中のある日、編集の村木勝さんは幾人かの子どもたちにインタヴューを試みていた。ひと通りのインタヴューが終わったあと、村木さんはほくの方に向かって来てこう言った。

「森末さん、このキャンプの中で一番おもしろいことはなに？ という質問をしたら、まさひろ（六年生）はどう答えたと思います？」。

さてさて、お釜を使って皆んなのために飯たきをするかどうか？ キャンプファイアーだろうか？ 魚のつかみどりだろうか？ それとも学校のなことに一切から開放されて仲間と過ごすことの総てだろうか？ よく分からない。

「なんやろ？」

「それがね、いろんなおたと会えること、と彼は言ったんです」

あつ、とぼくは絶句してしまった。そして、なるほど、と首肯した。



◀少しこわいけど頼りになる横山のおっちゃん、キャンプの後半でちよつとさみしくなった三年生のはると、おっちょこちょいの犬トラ

七泊八日のキャンプ全体が、一人一人の子どもを生活者として磨くための「教育装置」だということの理解は持っていた。ところが、そのキャンプを支えるために参加するおとなの位置、おとなと子どもの関係については、こういうことだと明言できる程の理解は持っていなかった。子どもを中心に、全日程を支えるためのサポーターという把え方をほくはしていたようだ。

まさひろの答えを聞いて、「そうだ、子どもたちにとつては、個性豊かなおとなたちとの出会いの場でもあるのだ」ということを、改めて肝に銘じた。

七泊八日の間に子どもたちが出会うおとなの数は、地元のスキー場の皆さんも含めると軽く五十人は越える。子どもに厳しい人もいれば、甘い人もいる。こわいけれど頼りになる人もいる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかくいくぐりながら、「あのおっちゃんはこのままでなら許してくれる。あのおばちゃん

んは、そうはいかん」と、子どもたちは自分とおとなの間にある距離を本能的な物指しで計測する。叱られたり誉められたりでの経験を繰り返し繰り返し積み重ねること、子どもたちの思考に「練り」が入る。「世間」に明るくなる。

おとなといえは親と教師くらいしか知らない子どもが増えている時代の中で、厚みのある出会いを楽しみつつ育つ子どもがいるのだ。

そういう場として意識して創った覚えはなかったのだが、一緒に働き、一緒に遊ぶ生活の中のおとなとの出会いは、とても大切なことを学ぶことのできる場でもあったのだ。

「おばさん、水がこぼれたよ」と言った二十歳は、まさひろとは決して重なりはしない。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ)